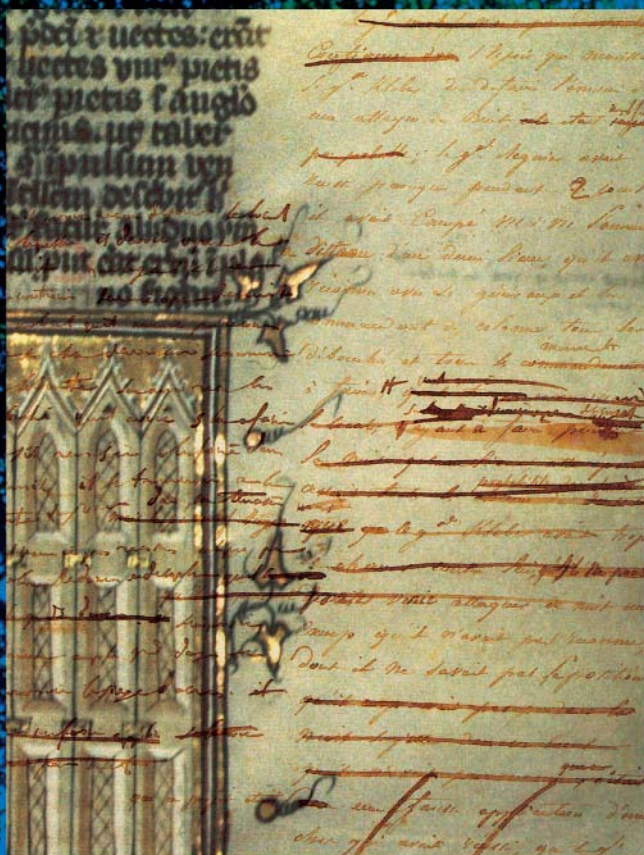




国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

2008.1
No.1

テキスト布置の解釈学的研究と教育



CONTENTS

巻頭言	グローバルCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」発足にあたって	02
海外の研究者からのグローバルCOE発足への祝辞		03
教育プログラム	講義科目の紹介	04
研究活動	グローバルCOE国際研究集会	06
	オープン・レクチャー	07
	グローバルCOE研究合宿の報告	08
名古屋大学グローバルCOEスタッフ紹介		09
第3回国際研究集会PROGRAM		11
Report & Information		12

グローバルCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」発足にあたって



佐藤 彰一

Sato Shoichi

● 拠点リーダー

本年度から開始したグローバルCOEは、大学院後期課程の学生の教育を充実させることに主眼をおいたプログラムです。人文科学の分野で全国12拠点の1つとして採択された私どもの「テキスト布置の解釈学的研究と教育」は、21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」の後継計画として発案され、文字テキストに特化した研究教育プログラムですが、これを選択した理由はこれまでのテキスト研究の蓄積がもっとも厚い層となっているのがこの分野であり、プログラムに沿った教育のための技術的手段や方法論が錬磨されている領域であるということにあります。その知的関心と探究の精神において、「統合テキスト科学」が育んだ先端的、学際的な方向性を聊かもゆるがせにするつもりはありません。

ここ数年大学を取り巻く環境は劇的に変化しました。その変容の内実が今後の日本社会にどのような影響をもたらすかは議論のある重大な問題ですが、人文科学の学問の徒として、ひとつだけ明確に言えることがあります。ある文化の独自性の深奥を、異なる文化的背景のもとで育って来た人々が理解するのは不可能であるという知的驕りが、これまで多くの人々の意識の

根底にあったように思いますが、感性の世界はともかく、少なくとも学問的営為の領分ではこれを完全に清算しなければならない時代に私たちが生きているという事実です。別の言い方をすれば、自分が生まれ育った文化を研究対象に選んだ者にとって、自らの言語以外に異なる文化の者にも理解可能な言語で、その成果を公表することに努めなければならないと思います。対象が日本でない場合は、第一義的に欧米の学術用語による成果発表が求められましょう。

そうした時代にわれわれは生きていますし、こうした努力は文化の多様性をコミュニケーション能力の涵養を介して定着させ、確実なものとする大事な手段と考えます。21世紀COE「統合テキスト科学の構築」に寄せられた高い評価は、その卓抜な海外発信能力に多くを負っています。「テキスト布置の解釈学的研究と教育」もまた、皆さんと共に事業を推進し、国際的に著名な研究教育の拠点となるよう願っています。

テキスト学の精緻化と若手研究者の教育



町田 健

Machida Ken

● 名古屋大学文学研究科
研究科長

名古屋大学文学研究科が、平成19年度より「テキスト布置の解釈学的研究と教育」というテーマのもとで、グローバルCOEに採択されたことは、研究科としてまことに喜ばしいことです。この採択が、人文学並びにテキスト学の拠点としての名大文学研究科の、国内外で認められた地位をさらに強固なものにするだろうことは疑い得ません。

本プログラムは、文学研究科が平成14年度より推進し、平成18年度で完了した21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」を継承発展させるものです。当該プログラムは、佐藤彰一教授をリーダーとして実行され、テキスト学の理論化を達成するとともに、若手の優秀な研究者を数多く育成しました。人文学を深化させ、新たな展望をもたらす成果をあげた統合テキスト科学の構築プロジェクトは、国内外から極めて高い評価を受けました。

かかる輝かしい成果を基礎として開始された本プログラムは、諸テキストにより構成されるテキストの体系を分析の基礎とするという点で、個別テキストの位置づけと解釈を一層精緻化する高い可能性を孕むものと言えます。その成果が、人文学を包括する役割を果たすテキスト学の射程を、さらに壮大なものにすることは間違いありません。

本プログラムではまた、若手研究者の教育にも重点が置かれています。確立されたテキスト学が、従来型の人文学諸分野と弁証法的に融合して発展を継続するためには、課程博士の効率的な取得をはじめとする、大学院生への教育が優れて有効な機能を果たすことは言うまでもありません。かくして研究のみならず、教育の分野において研究科の運営に、本プログラムが有益な寄与をなすものと確信しています。

拠点リーダー佐藤彰一教授のもと、本プログラムが以前にも増した輝かしい成果をあげ、世界の人文学を大きくそして格調高く発展させることを、名古屋大学文学研究科を代表して心よりお祈りする次第です。

海外の研究者からのグローバルCOE発足への祝辞



ジャック・ダララン氏

元 テクスト史研究所 (IRHT) 所長/フランス国立科学研究センター主任研究員

Jacques Dalarun

名古屋大学のプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」が卓越拠点として採択されたことを心よりお慶び申し上げます。このプログラムの第一の長所は歴史学、仏文学、日本文学、言語学、哲学、法学を結合させたその学際的性格です。さまざまな時代のさまざまな文化を視野に入れ、多文化的で多時間的であることです。そこでは著名な学問的権威と研究の未来を担う若手研究者が連携しています。そして私はこのプログラムが国際的に開かれたものであることをとりわけ評価いたします。このことはプログラムにとって付随的なことではなく、本質的なことです。というの

も現代では東洋と西洋の対話がかつてないほどに重要だからです。

私見ではテキストを関心の中心に据えることもまた同様に重要です。名古屋大学の本プログラムが考察するテキストとは、博物館の陳列品や時を超えた宝物などではなく、期待の地平や執筆の条件から書かれたものの受容や長期的な評価にまで至る、長きにわたるプロセスの結果です。このようなプログラムによってテキストは真に歴史の十全たる担い手となります。こうした研究があればこそ、テキストが未来の活気に満ちた随伴者であり続けることを我々は期待できるでしょう。



フランソワ・ラスティエ氏

パリ フランス国立科学研究センター主任研究員

François Rastier

皆様へ

このメッセージを皆様に送らせていただくのは私にとって喜びであり、光栄です。研究集会を通じて、また皆様の研究報告集、研究集会報告書を読ませていただき、テキストについての皆様の学際的研究が文化研究の現在の発展に対して重大な鍵を握るものであることを確信しました。

テキストは過去のものであるどころか、我々の目の前に存在します。インターネットの飛躍的な発展と電子化によって、社会的な要求はドキュメントの記号学を要請し、我々にとっては作品の解釈学によってドキュメントを分節化することが必要となっています。それは、書

記システムや草稿の研究に至るまで「文の科学」と「精神の科学」を結合させるということです。こうしてテキストをめぐる一連の問題は、非言語的な「テキスト」に至るまで、即ち複雑な記号学的な所作全体にまで広がる新たな考察を招来することになります。

人文科学と社会科学の主要な対象は、共時的また通時的に意味を与える多様性のもとに、そして一般的かつ比較対照的な展望のもとに捉えられたテキストによって構成されるので、皆様のプログラムは文化の科学に固有のエピステモロジーを構築することに理論的かつ実践的に寄与することになります。

心よりご成功をお祈り申し上げます！



講義科目の紹介

グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」では、大学院生がグローバル COE プログラムの枠組みの中で研究対象としている学問分野での読解技術と解釈技法を修得することで、個人の研究能力を向上することができるよう、大学院博士課程後期の学生を対象に一連の「テキスト布置解釈学」を開講しています。2007年度は「テキスト布置解釈学原論」のみが開講されましたが、2008年度からは、「テキスト布置解釈学各論Ⅰ～Ⅵ」として個別のテキスト領域を対象とする6つの授業を開講する計画です。各授業はグローバル COE プログラムの事業推進担当者が複数で担当し、「テキスト布置解釈学」の視点からそれぞれの学問分野を対象にした講義が行われます。今回紹介するのは2007年度後期に「テキスト布置解釈学原論」で行われた授業の講義概要です。

第1・2回 ● 2007年10月3日(日)

テキスト布置解釈学への誘い

松澤和宏 教授 (研究サプリーダー/仏文学)

或る人の発した言葉を理解しようとするとき、どのような操作を人は「理解」の名の下に行うのだろうか？

容易に思いつくことは、外国語を学ぶときの体験を重ね合わせて「理解」という営みを考えることである。辞書の定める単語の意味や文法を通して発せられた言葉を解説しようとすることになる。しかしながら、日頃、私たちが言葉を通して他人と意思疎通をはかったり読書をしている時に、実際に生きて働いている精神の営みは、辞書や文法の埒内には到底取まらない。なぜその人はこうした言葉を発したのか、そうした問いを抱かずには私たちの解釈の営みは一瞬たりとも成立しない。仮に言い表されたことが虚言であったとしても、虚言が言い表されたという事実の裡に、表現主体の意図を忖度することになる。機械論的因果関係の説明ではなく、相手の立場に身を置いて内在的に理解しようと努めなければならなくなる。表現内容の真偽ばかりではなく、他者の意図の理解が求められる。そこに身近でありながら、形式論理によっては合理化しきれない解釈という領域が顕れて

くる。自然科学とは異なる人文学の特徴の一つは、この解釈学的な営みにあると言えよう。勿論これは〈テキスト布置の解釈学〉に向かうほんの一步に過ぎない。なぜなら他者の意図を内側から理解しようとするいかなる営みも、解釈主体の主観性を完全に払拭することはできないからなのである。そもそも理解に先だって、理解を促し誘導するものに私たちは常に既に困窮されている。それを先入主と呼んでもよい。いかなる研究もこうした先入主から完全に解放されることはありえない。なぜならそれは理解をそもそも可能にする地平でもあるからである。

こうしてテキストの解釈は、発信者(著者)と受信者(解釈者)の両極を周回する∞の軌道を描く運動となる。言い換えれば、テキストとは二つの輪の接するところ、還元不可能な二重性として顕れてくる。一方で他方でもないが、つねに双方に同時に関わり合うという場、形式論理では捉え難い、排中律を超えた場ならざる場として顕現してくることになるだろう。

第3回 ● 2007年10月17日(日)

封建制概念のテキスト論的脱構築のために 佐藤彰一 教授 (GCOE拠点リーダー/西洋史学)

「封建制」という用語が、歴史研究において最も重要な概念の一つであることは、誰も異論を唱えるものはないであろう。もともとこの言葉は、西洋中世の「フューダリズム」を表現するために、中国古代の統治制度の類型を言い表す言葉から借用したものである。その制度的核芯にあるのは、主従関係形成の担保となった「封feudum」であり、封は家臣が主君への奉仕の対価として与えられる土地その他の利益を生み出す財貨のことである。封の授受の条件や、授受の法的効力などは時代によ

り変遷があり、これら変化を含めた多様な要素の総体がいわば「封建制度」と称されるシステムである。

こうした説明から理解されるように、このシステムの核となっているのは「封」であり、この「封」概念は11世紀から13世紀にかけて北イタリアで編纂された『封建法書 Libri Feudorum』において、初めて法概念として構築された。そして16世紀の一群の人文学者、法学者たちにより、この『封建法書』が再解釈され、現在我々が知るような形で確立した概念なのである。

やがてこの概念は啓蒙時代のヴォルテールの『習俗論』や、モンテスキューの『法の精神』などを通じて人口に膾炙し、1789年8月11日の有名な国民公会決議によって、歴史的な実体を具えた概念として定着した。カール・マルクスがこの概念を彼の歴史理論に巧みに取り込んで、世界史発展の基本法則を構築したことはよく知られている。それ以後、この概念が中世という時代を性格づける上で、なくてはならないものとなった。

だが翻って、『封建法書』以前に「封」の概念を用いた中世の人々が、果たして『封建法書』において13世紀の法学者たちが定義したような意味で「封」を理解したか否かは、実はそれほど自明とは言えないのである。

今回の講義は、封建制概念の生成に関する問題の所在と今後の研究の展望を示すに止め、『封建法書』の分析を手始めに、今後研究の進展に即して解明された問題を講ずる予定である。

第4回 ● 2007年10月24日(木) / 第5回 ● 2007年10月31日(木)

中世宗教テキストの地平

阿部泰郎 教授 (比較人文学)

日本の中世の宗教テキストの重要なコレクションである大須観音(真福寺)の蔵書に関して、神道テキストが、もっと大きな座標のもとで改めて再び位置づけられることになる、新たな発見が行われた。この報告はそのドキュメントとなる。

『太田命訓伝』は、卷子本の軸の合わせ目に「行忠」という署名があり、13世紀後半に活躍した、度会神道という中世の新しい思想の潮流の担い手、度会行忠の自筆本であることが確認された。また、『麗気記』と総称される、共通した同様の書誌的形態・特徴を持つ一連の神道テキストの体系がある。これは、いわゆる真言神道(両部神道)と呼ばれる、仏教とくに密教と深く結びついた神道のテキストである。これらが、どのような大きな体系のもとで位置づけられるか——その決定的な資料が、『野決目録』である。

『野決目録』中の「本抄」部の冒頭にあたる『大伝法灌頂注式』の奥書には、「野決」具書(いわゆる野決——小野流の口決——に属する一群のテキスト)全体の素性を示す伝来の著者の識語がある。正和2年、宏諭が

鏝海に、文保3年、鏝海が儀海に、そして観応3年、儀海が宥恵(真福寺初代濃信の弟子)に伝授したという。『野決目録』末尾の識語を見ると、「野決」具書は、醍醐僧正=勝賢と、北院御室=後白河院皇子・守覚法親王との問答によって生み出されたテキストであることが記しづけられている。

真言密教の流れは、広沢流と小野流の二つに大別される。醍醐寺を拠点として、小野流の中心をなしていたのが三宝院勝賢である。一方、守覚は広沢流に属し、法親王という特別尊貴な立場から、この両方に分裂した真言密教をひとつに統合しようという試みを展開した。これらの神道テキストは、守覚の求めによって勝賢が、小野流(その中でも三宝院流)の秘密をことごとく明かす——口決伝授のプロセスのもとで、次々と明かされていった秘密をテキスト化した書物であることがわかる。ひとつの大きなテキスト宇宙を形作った、守覚法親王という偉大なテキスト作成者の営為の一端として認知できるという意味でも、この「野決」具書群は画期的なテキスト布置の所産と認められるのである。

第6回 ● 2007年11月7日(木) / 第7回 ● 2007年11月14日(木)

日本古代の戸籍と計帳

古尾谷知浩 准教授 (日本史学)

本講義は、日本古代の歴史テキストのうち、中国から継受した法典である律令やその補足・改正・細則である格式などの法制史料群と、法の執行に伴って生成するテキストである行政文書群の布置構造を検討することを目的とした。具体的には、民衆支配の問題を取り上げ、戸令や賦役令の諸規定の構成、戸籍や計帳の作成手続を解説した。それを踏まえた上で、特に死亡者の取り扱い

を、法規定や戸籍・計帳の草案への書き込みなどから分析し、実態の変化が行政文書にどのように表現され、それが法規定にどのように反映されることになったのかを明らかにした。以上のことから、法制史料と行政文書が、実態としての社会の変化の中で双方向的に影響を与えていたことを示した。



グローバル COE 国際研究集会

GCOE 第1回 国際研究集会 (SHELL)

英語歴史テキストの文献学的・文法論的研究

2007年9月7日(金) - 9日(日)

名古屋大学文系総合館7F カンファレンスホール

SHELL は英語の歴史言語学に関する国際研究集会であり、アメリカにおける ICEHL (International Conference on English Historical Linguistics) やヨーロッパにおける SEHL (Sociedad Espanola de Historiografia Linguistica) と同じ役割を担うアジアの学会として2年に1度開催されている。SHELL は1996年に発足し、元々インターネットを通じて開催されてきたが、2005年に初めて、千葉大学においてオフライン式での大会が企画された。SHELL2007はその第2回大会として、名古屋大学グローバル COE との共催で、2007年9月7日(金)～9日(日)に名古屋



屋大学で開催されたものである。

SHELL2007では、「英語歴史テキストの文献学的・文法論的研究」をテーマとして、歴史言語学と名古屋大学グローバル COE が取り組むテキスト研究との接点を追求する試みがなされ、海外から3名の先駆的研究者、Dr. Marcus Manfred (University of Innsbruck)、Dr. Young-Bae Park (Kookmin University)、Dr. Hans Sauer (University of Munich) を迎えた招待講演や、シンポジウム“Old English versions of the Gospels: a dialectal-synchronic comparison”が行われた。海外から10件、国内から16件の応募があった研究発表には国内外から多数の参加者が集まり、連日白熱した議論が展開された。また、OED や多種多様なコーパスを利用した研究が多くみられ、英語史研究におけるデータの取得や検証方法についても非常に有意義な情報のやり取りがなされた。

GCOE 第2回 国際研究集会

バルザック、フローベール 作品の生成と解釈の問題

2007年12月14日(金) - 16日(日)

名古屋大学文系総合館7F カンファレンスホール

第2回国際研究集会「バルザック、フローベール作品の生成と解釈の問題」が、フランス、アメリカ、カナダから、研究の最前線で活躍している5名の外国人研究者を招いて、12月14日から16日まで3日間にわたって催された。初日には佐藤教授の挨拶や松澤教授の開会の挨拶のなかで、本プログラムとシンポジウムの趣旨が説明された。作品の生成過程の研究は、従来の文学史や作家研究に加えて、作家の草稿研究を主眼とする生成論と呼ばれる新たな学問が近年発展してきている。しかしながら作品の生成過程をできるだけ客観的に記述しようとする研究は、果たして解釈という営みとは無関係になされる実証主義的な性格のものなのであろうか。解釈の問題は、作品の生成過程を扱う実証研究とは区別されて、作品受容の問題として主に考察されてきた傾向があった。今回のシンポジウムでは、解釈の営みが作品の受容においてばかりか、作品生成の過程においても主要な役割を果たしているのではないか、という問いかけを発条として、バルザ

ックとフローベールという19世紀フランスを代表する作家の草稿を含むコーパスを取り上げ、充実した研究報告がなされた。書くという営みがすでに書かれたものを再解釈する営みでもあり、先行する、あるいは同時代の様々なテキストに応答する営みであることが、抽象的な一般論に陥らずに、作品解釈を具体的に更新する成果を挙げながら明らかにされていった。とりわけ特筆すべきことは、各講演が独創的なものであったこと、および各講演の後で実に活発な議論が展開されたことである。テキスト布置の解釈学的研究の有効性についての松澤教授の見解には外国の研究者からも実に好意的で積極的な意見が相次いで表明され、フランスでも稀なほどの生産的な意見交換が実現したと言えよう。





オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラムでは21世紀 COE プログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催しています。毎月1回水曜日の18時から、グローバル COE が名古屋国際センタービルの15階に開設しているグローバル COE オフィスで、「テキスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当の先生やその他の先生がレクチャーします。参加は自由です。毎回の題目などは Web サイトでお知らせしています。2007年10月から開催した3回の概要を紹介します。

第1回

封建制概念のテキスト論的脱構築のために

2007年10月17日(金)
18時—19時

佐藤 彰一 教授 (GCOE拠点リーダー/西洋史学)

「封建制」と呼ばれる社会体制についての認識は、広く人口に膾炙し、もっとも日常的な歴史用語の一つであろう。同時にまたその親しみ易さのゆえに、誤解されている面も少なくない。それは歴史学に関わりをもたない一般人だけでなく、歴史学や社会経済史の専門家にまで及ぶ側面をもっている。そして厳密に言えば、この体制が社会の現実であった12、13世紀に誤解は胚胎していたことが考えられる。今回のレクチャーは、11世紀末から13世紀中頃にかけて編まれた私撰の法書『封建法書 Libri feudorum』に発し、これへの16世紀の人文主義者の再解

釈、18世紀の啓蒙思想家の見解、カール・マルクスの一連の著作を経て、1939–40年のマルク・ブロックの『封建社会』の刊行にいたる「封建制」概念の流布の系譜をたどり、これらすべてを封建制のメタテキストとして脱構築する研究計画の概要を紹介した。中世西欧で現実実践されていた「封」や、「封」授受の行為を当時最新の知識であった「復活されたローマ法」をローマ法学者たちがどのように駆使して、それらを法学的に構築したか、その際、どのような布置構造が生成したかを、幾層にもわたる解釈学的操作により解明するのが今後の課題である。

第2回

日本人と漢字

2007年11月14日(金)
18時—19時

釘貫 亨 教授 (日本語学)

漢字は、中国から伝来したものであるから日本人にとって外国の文字である。漢字によって日本の土地や人の名を表すのに、音読みを借用して日本語音節を転写する仮名用法(能登、伊勢、麻呂など)が奈良時代以前に開発された。ここから平安時代に平仮名、片仮名が創出され、日本独自の文字が生まれた。漢文は依然として知的文章に使われたが、鎌倉時代以後、仏教僧が民衆教化のための文章に漢字片仮名文を用いた。漢字には多くの場合、

振り仮名が付けられて、漢字が仏教を媒介にして大衆社会に流出し始めた。この趨勢は、中世社会を一貫したが、近世期には世俗的な娯楽本が数多く出版され、ここにも漢字に振り仮名が付された。その教育効果によって社会に漢字情報が浸透し、19世紀後半の日本は、世界に類例のないリテラシーの高さを実現した。漢字によって、押し寄せる西洋の科学、思想、制度の諸概念を翻訳できたことが日本の近代化に大きく貢献した。

第3回

『三つの物語』はフローベール作品における小休止なのか？

2007年12月12日(金)
18時—19時30分

ピエール=ルイ・レ 教授 (パリ第三大学教授)

この三部作は、どうやらフローベールの当初からの意図に呼応して作られたものではない。フローベールは別々に発表した物語を一冊にまとめたのであり、その全体は一見したところ、飽くことなく書き直された『聖アントワヌの誘惑』や、完結することのなかった『ブヴァールとペキュシェ』といった大作の間の小休止となっ

ているようにも思える。だが重要なのは、異なる時代(同時代、中世、古代)の物語の集積が、主題や筋立てといった概念を無効にするような形式的類似性を提示し、構想的な統一性を獲得していることである。かくして『三つの物語』は、フローベールが追い求めた「無についての書物」への一歩だったのであろう。

GCOE
研究合宿
の報告

去る10月27日(土)～28日(日)に三重県松阪市および津市にてGCOE推進担当者と研究員による研究合宿が行われました。初日は本居宣長記念館を訪問して資料調査を行った後、日本語学・釘貫亨教授の研究発表と全体での討議、二日目は講師にお招きした米国・マサチューセッツ工科大学教授の宮川繁先生による研究発表と討論を行いました。

小澤実・GCOE研究員による宣長記念館探訪記と、研究発表ご担当の先生による要旨を下記に掲載します。

平成19年10月22日昼過ぎ、近鉄松阪駅に集合したわれわれ名古屋大学文学研究科グローバルCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」一行は、小降りの中タクシーに分乗し本居宣長記念館をめざした。

1730年伊勢松坂に生を享けた本居宣長は、日本特有の倫理的態度「ものあわれ」を導き出した国学者として知られる。故郷で先学賀茂真淵との衝撃的な出会いを果たした宣長は、医師として生計をたてながら『古事記』への注釈を35年にわたって続けた。彼はこの代表作『古事記伝』44巻のみならず、源氏物語の注釈書『源氏物語玉の小櫛』や古典対峙のエッセンスを詰め込んだ『玉勝間』等膨大な数の著作を今に残している。真摯な文献学的態度で古典に接した宣長は、日本におけるテキスト学の祖であるといってもよい。

本居宣長記念館は、このようなテキスト群がまさに生まれる過程を知覚できる贅沢な空間であった。『万葉集』や『古事記』の刊本

宣長記念館探訪記

小澤実

の欄外にはカタカナ交じりの注釈がびっしりと書き込まれ、自らの著作には度重なる推敲の痕跡が認められる。圧巻は『天地図』であった。12世紀イタリアの修道士フィオーレのヨアキムの思考世界を図解した『形象の書』を想起させるこの『天地図』は、『古事記』に記される神話コスモロジーの図案化である。落手した『古事記』の刊本の読み込みとそこへの書き込み、その思考の在り方を筋道だてた『古事記伝』の稿本化、そして大量の注釈を消化しきれない人への教育的な配慮も含めた『天地図』による図解。宣長の思考がさまざまな形で現れるこのテキスト群の小宇宙は、参加者各人の人文学的好奇心に訴えただけではなく、「テキスト布置の解釈学的研究と教育」プロジェクトにとって貴重な示唆を与えてくれた。

二時間弱の至福の時を終えとすすでに雨はあがっていた。一行は宣長も踏みしめたであろう石畳をたどって再度松阪駅に向かった。

合宿研究発表 日本文法学における「文sentence」の規定の問題について

釘貫亨

文法学は、19世紀に言語学が成立して以来、伝統的な各国語の規範文法から科学的な記述文法へと展開した。山田孝雄(1873～1958)は、日本文法学における記述文法の確立者として高い評価を受けている。所謂「山田文法」は、文法学の観察対象である「文sentence」の定義に特色を持っている。山田は、従前の文法理論における文の定義が「あるまとまった意味と思想の表明」という類の説明に終わっていることに疑問を呈する。山田は、如何なる条件が整えば「まとまった意味と思想の表明」に達することが出来るのかという、より根源的な問いを発した。これは従来の文法理論に存在しないラジカルな提起であった。山田によれば文は、主語と述語との完備という形式的な側面だけでなく単語群を意味ある情報にまとめ上げてゆく精神的心理的な作用が必要であると考

た。そのような作用概念を山田は、当時最新の心理学説であったヴントの理論によって「統覚作用 apperception」と呼んだ。統覚は、所定の規則によって並んだ単語(群)にひとまとまりの情報にふさわしい意識の注点に生ずる一回限りの作用であって、これがあって始めて文が成立すると考えた。しかし、統覚の原語 Apperception は、山田が参照した元良勇次郎・中島泰蔵訳『心理学概論』(富山房、明治32年1899)では、「明覚」と訳されており、山田はこれに従わず、桑木巖翼『哲学概論』(東京専門学校出版部、明治33年1900)におけるカント哲学における Apperception の訳語である「統覚」の語を採用している。この事実、山田の概念の由来がヴントに方法論を提供したカント『純粹理性批判』にさかのぼることを示すものである。このことは従来の日本語学では未報告である。

Unlocking Knowledge, Empowering Minds

宮川繁

Open Course Ware (以下、OCW) は現在 Massachusetts Institute of Technology (以下、MIT) で実施されている2000科目の授業教材を Web 経由で無償で利用できる仕組みであり、MIT 以外でも2007年現在で世界150大学が参加するグローバルな規模の教材公開のための枠組みになっている。本発表では、OCWの歴史をたどりつつその意義を確認し、OCWの活動を経て明らかになった image reading の教育的な重要性を主張するものである。

1990年代後半に始まったいわゆるドット・コム・ビジネスの流れを受けてアメリカの各大学では e-learning 教材の販売を開始していた。1999年に MIT でも同様のビジネスの可能性を探る委員会が学内に設置され議論を重ねた結果、教材を販売するという教育倫理的な問題に加え、e-learning 教材の販売がビジネスとして必ずしも成功していなかったという経営上の問題もあり、MITとしては全く新しいモデルを高等教育の分野に提示することを決定した。OCWの利用者は学生だけでなく教員や独学者などで毎月200

万以上のアクセスを記録しているが、利用者を対象とした事後的なアンケート調査によると閲覧者の66%は学士以上の学位を有しており、現在公開されている教材の質の高さを伺うことができる。また MIT では高校生の大学進学判断材料にも大きく貢献していることが分かっている。

OCW が提供する教材の多くは画像などを豊富に使っているという特徴があるが、こうした画像を無償公開という枠組みで利用するためには著作権等の問題をクリアしなければならない。教材のデジタル化と著作権の確認は、OCW事業の1/3を占める重要な課題である。しかし画像を用いた教材を読み解くための方法論はまだ確立していないため、名古屋大学文学研究科グローバルCOEプログラムの独創的な研究とその成果に大いに期待しているところである。開発された方法論に基づいた教育が実施されることで、画像を前にして国家間の歴史認識の相違などに由来する不用意な衝突も避けることができるであろう。

事業推進担当者

歴史テキストグループ

● 佐藤彰一 教授 チーフ・拠点リーダー

Sato Shoichi

封建制概念のテキスト論的脱構築——11世紀末から13世紀中頃にかけて編まれた私撰の法書『封建法書 Libri feudorum』に発し、これへの16世紀の人文主義者の再解釈、18世紀の啓蒙思想家の見解、カール・マルクスの一連の著作を経て、1939-40年のマルク・ブロックの『封建社会』の刊行にいたる「封建制」概念の流布の系譜をたどり、これらすべてを封建制のメタテキストとして脱構築するのが研究の課題である。



● 和崎春日 教授

Wazaki Haruka

文化人類学専攻。日本とアフリカの二つの社会をフィールドとする。より具体的には、京都「大文字五山送り火」を中心とした日本の都市祭礼と、カメルーン・バムン王都を中心としたアフリカ王権社会の二つをめぐる都市人類学を、この30年来、研究している。人類学のなかでも「未開」社会ではなく現代的な都市人類学を専門とする。したがって、国家や都市といった複合的で変化の激しいコンテキスト状況、さらには資本制というこれも変化の激しい経済コンテキスト状況のなかでの儀礼や行動をテキストとして動的に読み取る研究を進めている。同時に、アフリカへのフィールドワークの深まりに伴う、当該社会・文化への誤解の解消と読み取りの深化、それに随伴する？ 自分が依拠していた日本文化の解釈枠組みの変換という、時間的に複数現れる同一テキストの諸フェーズを動的に扱う「動的・遷移的テキスト布置論」を研究している。1949年生。慶應義塾大学博士（社会学）。



● 古尾谷知宏 准教授

Furuoya Tomohiro

専門は日本古代史。研究の柱は二つある。一つは律令国家研究、一つは出土文字資料研究である。律令格式をはじめとする法制史料と、出土文字資料を含む一次史料を照らし合わせることで、国家支配のあり方とこれが対峙した社会の実態との相互関係が解明できると考えている。



文学テキストグループ

● 松澤和宏 教授 研究サブリーター

Matsuzawa Kazuhiro

パリ第8大学に提出・刊行された博士論文『フローベール『感情教育』草稿の生成批評研究序説』が私の研究上の出発点です。その後『『ボヴァリー夫人』を読む——恋愛・金銭・言葉』（岩波書店）をはじめフランスのシンポジウムに何度か招かれて研究発表を重ねてきました。また現代言語学の始祖と呼ばれるフェルディナン・ド・ソシュールの草稿に魅了され、弟子たちの編集した『一般言語学講義』との乖離をめぐる問題をめぐって、ジュネーブ大学公立図書館に足を運ぶようになって十数年が経ちます。また日本近代文学の漱石『心』や宮沢賢治『銀河鉄道の夜』の草稿にも取り組み、『生成論の探究』（名古屋大学出版会）を上梓しました。こうした生成論的探究を通して、作家研究の枠組みを超えて、テキストとは何か？ 解釈するとはどのような営みなのか？ という問いを自分の中で深めるべく努めています。近年は（アンチ）モダニズムをめぐる文学・思想上の問題にも関心を寄せています。



● 小川正廣 教授

Ogawa Masahiro

西洋古代の社会的・歴史的コンテキストの中に古典作品の文字テキストを布置し、その文化的相互関連のダイナミズムを綿密に分析しながら、ギリシア世界とローマ世界の連続性と非連続性を考究する。とくに古代世界における「自由」、「他者」、「共生」の概念の変容についてジャンル横断的な研究を行なう。



● 高橋 亨 教授

Takahashi Toru

10世紀から12世紀にかけての、平安朝の物語における和歌と絵画資料との関係について、テキストの立場から考察する。『竹取物語』『伊勢物語』『源氏物語』『狭衣物語』等が主要な対象であり、それらのテキスト生成における和歌などプレテキストとの引用関連、また、物語享受における和歌や絵画資料との関連を研究する。



● 鎌田隆行 講師

Takayuki Kamada

十九世紀フランス文学、特にバルザックの作品の生成論的研究を進めている。本プログラムにおいてはバルザックにおける多様なテキスト性の現れと、複雑な生成の挙措との関係を解釈学的な理論的視座のもとに分析する。特に、小説内の現実物としてのテキスト、パラテキスト、再登場人物網の生成の問題に取り組む予定である。



特任教員

● 平野克典

Hirano Katsunori

本プロジェクトが掲げる「テキスト布置」を概念枠（準拠枠）として、インドの哲学テキストにおける意味生成・解釈に関する新知見の構築を目指す。研究対象は、インドの正統六派哲学派の一つであるニヤーヤ学派（インド論理学派）の1cから6cに書かれた諸哲学テキストである。



● 小澤 実

私の課題はルーン文字のテキスト論である。ルーン文字とは2世紀にゲルマン世界で生み出された24文字（のち16文字に減少）からなる独特のアルファベットであり、フサルクと呼ばれる。このルーン文字がどのように生成し、変容し、機能し、そして影響したのかを、それが利用されたコンテキストに留意しながら歴史学的に解明することにある。

Ozawa Minoru



● 永田道弘

レーモン・ルーセル（1877-1933）の小説作品、特に『アフリカの印象』の草稿の分析を通じて、言語の非人称的なメカニズムからのみ作品を説明するようなフーコー的解釈の迂路をたどりつつも、このような解釈を相対化し、それが軽視してきたテキストをとりまく社会・文化的コンテキストに置き直すという解釈作業をめざす。特に、当時のフランス社会で広く共有された通俗的な「アフリカ」の表象とルーセルの小説の関係を、その生成プロセスを辿ることで、明らかにしていきたい。

Nagata Michihiro



● 金銀珠

本研究は、近代日本文学における品詞概念の歴史的形成過程の動態を明らかにすることを目的とする。近代日本文学は、江戸時代の蘭学をはじめとすると近世洋学および伝統的な国学、さらには、近代西洋文学を資源にして成立しているが、本研究が対象とするものは、江戸後期の蘭学から明治以降、近代日本文学が成立してくる過渡期の様相に関して歴史的資料を駆使して、その学説史の動態を再現しようとする。

Kim Eunju



● 西村善矢

専門は中世イタリア農村史。イタリアには、中世初期・盛期に作成された証書や実務文書（地代帳など）が、オリジナルの形で豊富に伝来する。グローバル COE プログラムでは、これら歴史テキストを対象に、古書体学や文書形式学などの歴史補助学をも援用しつつ、テキストの生成過程や生成を支えるコンテキストの解明に取り組む。

Nishimura Yoshiya



● 小林 智

自由民主政において、法的テキストの解釈は、法が国家の権力行使を一方で正当化し他方でその限界を画するという機能を有することを通じて、権力作動によって担保される個人の自由の実現と結びついている。そうした法規範解釈を前提とする自由＝法的権利実現の公共的性格を正確に捉える理論を構築すべく、研究を進めたい。

Kobayashi Satoshi



● 谷部真吾

日本の、いわゆる「伝統的な都市祭礼」の変容プロセスを文化人類学的・民俗学的に分析することで、現代社会のあり様を明らかにしたい。祭りとは集合行為であるため、これを変化させるためには関係者間での合意形成がどうしても必要となる。本研究では、そうした合意形成過程に注目し、そこで言語化された地域の人々の様々な「意見」をテキストとして分析することで、現代とはいかなる時代なのかを考えていくつもりである。

Yabe Shingo



● 品川大輔

アフリカ大陸赤道以南で広く行われるバンツ語（ニジェール・コンゴ語族）の記述言語学的研究を専門とする。修士論文執筆時の2000年よりほぼ毎年、タンザニア北部の山村アケリ村に、現地少数民族語であるルワ語（キリマンジャロ・バンツ語）の記述調査に赴いている。2004年から2005年にかけて、日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターに派遣研究者として駐在したことを契機に、当地の混合言語コード「シェン（Sheng）」の構造記述にも関心を向けている。

Shinagawa Daisuke



● 横越 梓

言語テキストの構造を解明することを目的とし、機能文法理論と生成文法理論に基づいた英語のテキスト分析を主な研究課題としている。文の生成にかかわる統語論と周囲のテキストとの関係、そしてさらに全体としてのテキストの構造を、主に歴史的な言語データの調査や、現代英語における叙述関係や視点についての検証を通じて考察したい。

Yokogoshi Azusa



● 杉山奈生子

18世紀フランスの画家アントワーヌ・ヴァトーが雅宴画に描いた彫刻モチーフについて、従来の美術史的技法に加え、コンテキストにある題材を適用し、テキスト布置の総体としての解釈を試みる。具体的には、同時代の古代彫刻版画集やヴェルサイユ庭園の彫刻版画集、庭園彫刻の受容に関する言説を調査し、公的なプロパガンダとしてではなく、18世紀に特徴的な目を喜ばせる私的な鑑賞用としての絵画であったヴァトー作品の新たな解釈を探る。

Sugiyama Naoko





グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」
第3回国際研究集会

Global COE Program
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
International Conference

テキスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る

Identity in Text Interpretation and Everyday Life

PROGRAM

2/9 [Sat]

● 9:50 開会の辞 佐藤彰一 (名古屋大学グローバルCOE拠点リーダー)

● 10:00-12:00

O'Toole, Lawrence (マードック大学) Subtexts: a Systemic-Functional Semiotics of English Gothic Misericords

Agha, Asif (ペンシルバニア大学) Commodity Registers

● 13:30-15:30

宮川 繁 (マサチューセッツ工科大学) Visualizing Cultures

O'Halloran, Kay (国立シンガポール大学) Texts, Identity, and Everyday Life in the Digital Age

重見晋也 (名古屋大学) Textual Identity of Web

● 16:00-17:30

Dunn, Cyndi (北アイオワ大学) "Something old; something new": Cultural Bricolage in Japanese Wedding Speeches

Herlofsky, William (名古屋学院大学) Cultural Identity and the Production and Understanding of Sign Language Signs
— Identifying, Interpreting, and Preserving the Cultural Information in Iconic Signs

2/10 [Sun]

● 10:00-12:00

Occhi, Debra (宮崎国際大学) Dialect Speakers on Dialect Speech

Goebel, Zane (名古屋大学) Enregisterment, Alternation and Difference: Insiders and Outsiders
in an Indonesian Neighbourhood

佐藤 彰 (大阪大学) Constructing Group Identity through Narratives on BBS

● 13:30-16:00

大門正幸 (中部大学) Language Structure as a Reflection of Cultural Schema

Haig, Edward (名古屋大学) A Critical Discourse Study of Youth Crime in UK Radio News

天野政千代 (名古屋大学) Modality as Identity in Text Interpretation and Creation

● 16:00-17:00

総括討論 天野政千代 (名古屋大学) Goebel, Zane (名古屋大学) O'Toole, Lawrence (マードック大学)

2008年2月9日(土)・10日(日) 名古屋大学文学部 文学研究科237室

主催 ● 名古屋大学文学研究科 使用言語 ● 英語 (通訳なし)

連絡先 ● 名古屋大学文学研究科 天野政千代 ファックス・電話 ● 052-789-2269 Email ● mamano@lit.nagoya-u.ac.jp

外国人招聘研究者紹介

マードック大学(パース、西オーストラリア)から招聘されたマイケル・オトゥール名誉教授は記号論、言語学、文芸文体論と多重伝達形態論を専門としています。先生の *The Language of Displayed Art* (1994) は M.A.K. ハリデーの機能主義文法法の原則と分析方法を絵画、彫刻、建築などの視覚芸術に適用とした初めての試みでした。先生は2008年2月から文学研究科のグローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」に招聘されており、2月9日と10日の両日開催される国際研究集会『テキスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る』で研究発表を、また次の日程で連続講演を行うことになっています。



- ① 1月25日(金) 16:30 ● Functional Theories of Language
 - ② 2月15日(金) 16:30 ● A Tri-functional view of Architecture
 - ③ 2月20日(水) 18:00 ● Multimodality : Engaging with Painting
 - ④ 2月27日(水) 16:30 ● Advertising : Words and Images
- ①②④ 於：名古屋大学文学部文学研究科128室
③ 於：名古屋国際センタービル名古屋大学グローバル COE オフィス

大学院生海外派遣事業について

グローバル COE プログラムでは専門分野における大学院生の研究能力の養成を図るため、国外の大学・大学院または研究機関等での研究・調査の希望者を毎年募集します。2007年度の募集は既に締め切れ、次の3名が派遣大学院生に決定しました。

- 鈴木球子 (フランス文学、フランス)
- 三好俊徳 (仏教史、イギリス)
- 吉田早悠里 (文化人類学、エチオピア)

大学院生海外派遣事業での派遣大学院生に採用されると、3ヶ月間100万円を限度とする派遣費用が支給されます。また、帰国後に次年度の研究論集『HERSETEC』へ寄稿することが可能になります。

2008年度の募集時期などについてはまだ未定ですが、決まり次第グローバル COE の Web サイトや gcoe_infos のメーリングリストでお知らせします。2007年度の募集要項は次の通りでした。

1. 募集人員 若干名

2. 応募資格

- ① 平成19年度に本研究科の大学院博士後期課程に在籍し、「テキスト布置の解釈学的研究と教育」の趣旨に即した、国際的水準の研究を成し遂げる能力と意志を持つ者。派遣先で使用する言語について一定の能力を有すること。
- ② 受入れ先の機関が一定の資格や条件を求める時は、資格や条件を満たしていること。

3. 派遣期間と費用

- ① 海外の派遣先における滞在期間は最大限3ヶ月までとする。
- ② 必要な旅費(往復)の全額及び滞在費の一部、必要と認められた場合の備品・通信費等を支給する。滞在費の支給額については当プログラムの規定に基づいて決定するが、100万円を限度とする。
- ③ 平成20年3月25日までは必ず帰国することとする。

4. 提出書類

- ① 履歴書(写真貼付、高卒以降の履歴を記入、ワープロ可)
- ② 研究業績一覧
- ③ 研究計画書(A4用紙、1200字程度。専攻分野、研究・調査内容、方法論、希望する派遣先の機関を明記すること)

グローバル COE 論文賞の募集について

名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラム『テキスト布置の解釈学的研究と教育』では下記の要領で論文を募り、「グローバル COE 論文賞」として顕彰します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。

1. 募集の目的 課程博士論文執筆に至る優れた認定論文の顕彰
2. 主催 名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラム
3. 応募資格 「テキスト布置解釈学」関連の授業から最低1つを受講していること(ただし本年度については特に問いません)。
4. 提出するもの 名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラム『テキスト布置の解釈学的研究と教育』に関連するテキストを対象とした研究。研究対象とするテキストは特に指定しません。論文は原則として1人1編、単著とし未発表のものに限ります(未発表の認定論文は可)。
 - ① 論文(使用言語は日本語・英語・フランス語に限る)
A4判用紙20枚程度まで(図表を含む)
(詳細は Web 掲載の執筆要項を参照のこと)。
 - ② 論文要旨：A4判半ページ程度
(本文の使用言語にかかわらず英語の要旨)
 - ③ 申込用紙
5. 提出方法 応募の際は指定の申込用紙をグローバル COE の Web からダウンロードの上、必要事項を明記して、論文・要旨ファイルとともに電子メールに添付して下記のメール・アドレスに送付するとともに、提出するファイルをプリントアウトしたものを各1部ずつ、「グローバル COE 論文賞応募論文在中」と朱書した封筒に入れ、下記の住所に郵送してください。
6. 選考方法と発表 主催者において審査委員会を設け、審査を行います。審査結果は、2008年2月下旬に応募者全員にお知らせします。また、優秀と認められた場合でも、審査委員会が必要と認めた場合は、論集への掲載にあたって応募者に修正を求めることがあります。選ばれた論文は、『HERSETEC』(2008年3月刊行予定)に掲載すると同時にグローバル COE の Web 及び名古屋大学学術リポジトリに登録し、一般公開します。
7. 受付期間・提出先・問い合わせ先

受付期間：2008年2月15日(金)～2月22日(金)

提出先・問い合わせ先

名古屋大学大学院文学研究科内 グローバル COE 事務室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

e-mail : bureau@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp

URL : http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

事務局からのお知らせ

グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」では、大学院生を対象に、グローバル COE プログラムの活動を知り積極的に参加していただくために、メーリングリストを開設しています。メーリングリストでは、「グローバル COE 論文賞」や「大学院生海外派遣事業」の募集案内をはじめとして、研究会や国際研究集会の案内も発信しています。メールを受け取りたいメール・アドレスから次のメール・アドレスに空メールを送ってメーリングリストに登録してください。携帯電話のメール・アドレスでも登録可能です。

gcoe_infos-join@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp



国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム
テキスト布置の解釈学的研究と教育

発行日 2008年1月31日

発行 名古屋大学大学院文学研究科



名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOE事務室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL/FAX 052-747-6450

名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOEオフィス
〒450-0001 名古屋市中村区那古野一丁目47番1号 名古屋国際センタービル15F
TEL 052-587-1710 FAX 052-587-1709



国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

2008.1
No.1

テキスト布置の解釈学的研究と教育



CONTENTS

- 巻頭言 グローバルCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」発足にあたって 02
- 海外の研究者からのグローバルCOE発足への祝辞 03
- 教育プログラム 講義科目の紹介 04
- 研究活動 グローバルCOE国際研究集会 06
- オープン・レクチャー 07
- グローバルCOE研究合宿の報告 08
- 名古屋大学グローバルCOEスタッフ紹介 09
- 第3回国際研究集会PROGRAM 11
- Report & Information 12